澤野久雄　訳

徳富蘆花

不如帰

井上ひさし訳
伊藤信吉編

明治の古典 全10巻

1	円朝・黙阿弥	怪談牡丹燈籠 天衣紛上野初花	井上ひさし訳
2	尾崎紅葉	金色夜叉	森　敦訳
3	樋口一葉	たけくらべ　にごりえ	円地文子 田中澄江訳
4	泉　鏡花	高野聖　歌行燈	秦恒平訳編
5	徳富蘆花	不如帰	澤野久雄訳
6	島崎藤村	若菜集　春	伊藤信吉編
7	独歩・四迷	武蔵野　平凡	篠田一士編
8	森　鷗外	舞姫　雁	井上靖訳編
9	夏目漱石	吾輩は猫である	山本健吉編
10	晶子・敏 白秋・啄木	明治の詩歌	谷川俊太郎編

カラーグラフィック　明治の古典　5

不如帰　澤野久雄　訳

一九八二年四月九日　第一刷発行
定価　二、四〇〇円

発行人　鈴木泰二
発行所　学研（株式会社学習研究社）
（〒一四五）東京都大田区上池台四丁目四〇番五号
電話　東京（〇三）七二〇―一一一一（大代表）
振替・東京八―一四二九三〇

印刷所　日本写真印刷株式会社
廣済堂印刷株式会社
用紙　三菱製紙株式会社
王子製紙株式会社
製本所　和田製本工業株式会社
製函所　凸版印刷株式会社（包材事業部）

※この本の内容・製本などに関するお問い合せは、左記あてにお願いします。
文書は（〒一四五）東京都大田区上池台四丁目四〇番五号
学研お客さま相談センター「明治の古典」係
電話は　東京（〇三）七二〇―一一一一（大代表）

©GAKKEN　一九八二　本書内容の無断転載・複写を禁ず

Printed in Japan

◆落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

明治の古典5

徳富蘆花
不如帰

澤野久雄　訳

学習研究社

目次

不如帰

澤野久雄訳

5

口絵 6

上編 12

暮れなずむ上州伊香保の宿。窓辺に立ち、夫の帰りを待ちわびる若く美しい婦人は、陸軍中将片岡毅の長女浪子である。海軍少尉川島武男に嫁ぎ、はじめて幸せな日々を味わうのだったが——

中編 44

ふとひきこんだ風邪がもとで床についた浪子は、やがてその胸を死に至る病いに冒される。家系の断絶をおそれ離縁を迫る母。必死にあらがう夫。逗子に療養する浪子は夢にもそれを知らない。

下編 102

もう、もう二度と女なんかに生まれはしない——血を吐くような叫

注釈 山田有策
写真 柳沢 信

びを残して、浪子は悲哀に満ちた短い生涯を終えた。明治二十八年、日清戦争の戦勝ムードにわく東京青山・片岡中将邸の一室であった。

訳者覚え書 ―― 澤野久雄 140

劇化された「不如帰」 ―― 戸板康二 166

特集口絵 蘆花のスケッチ・ブック ―― 横山春一 141

評伝 蘆花・徳冨健次郎の生涯 ―― 尾崎秀樹 149

解説 『不如帰』の作品世界 ―― 山田有策 156

エッセイ ヤースナヤ・ポリャーナの蘆花 ―― 木村浩 160

エッセイ 謀叛のすすめ ―― 佐古純一郎 162

文学風土記 徳冨蘆花 ―― 大河内昭爾 167

作品小事典 ―― 山田有策 164

年譜 ―― 山田有策 170

原文(抄)

上州伊香保千明の三階の障子開きて ―― 17

あゝ死！ 以前世を辛らしと見し頃は ―― 88

包紙をとりて、吾名を書ける筆の跡を見るより ―― 117

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

編集委員

井上　靖
円地文子
尾崎秀樹
山本健吉

（50音順）

■執筆者

澤野久雄（作家）

大河内昭爾（武蔵野女子大学教授）
尾崎秀樹（文芸評論家）
木村彦三郎（作家）
木村浩（ロシア文学者）
佐古純一郎（文芸評論家）
戸板康二（演劇評論家・作家）
三宅正太郎（美術評論家）
山田有策（東京学芸大学助教授）
横山春一（蘆花会会長）　（50音順）

■写真取材協力・提供

浅井コレクション　大塚巧藝社　神奈川県立博物館　鹿子木君子　京都市美術館　群馬県立近代美術館　高知市立中央公民館　国立劇場　国立国会図書館　小林賢吾　佐々木明美　瀬川弘悦　竹久不二彦　竹久夢二伊香保記念館　田島一郎　千明仁泉亭　東京芸術大学　東京国立近代美術館　東京国立博物館　高橋誠一郎　中沢光敏　南部緑地公園事務所　日本近代文学館　東山魁夷　フィルムライブラリー　福富太郎コレクション　婦人画報社　ブリヂストン美術館　松井昌　満谷美恵子　山種美術館　山田肇　蘆花恒春園　渡辺圭二　杉野学園衣裳博物館　（50音順）

■撮影

柳沢信　高橋敏
小塩寿夫　原耕平　大隅隆章

■装幀

奥野玲子

■ＡＤ

奥野玲子

■レイアウト

アール・グラフィース

■編集スタッフ

（編集）星瑠璃子　宮下襄　有働義彦　斎藤正憲　岡部佳子
（校正）東和哉

■写真取材

樋渡芳之　中山順一朗

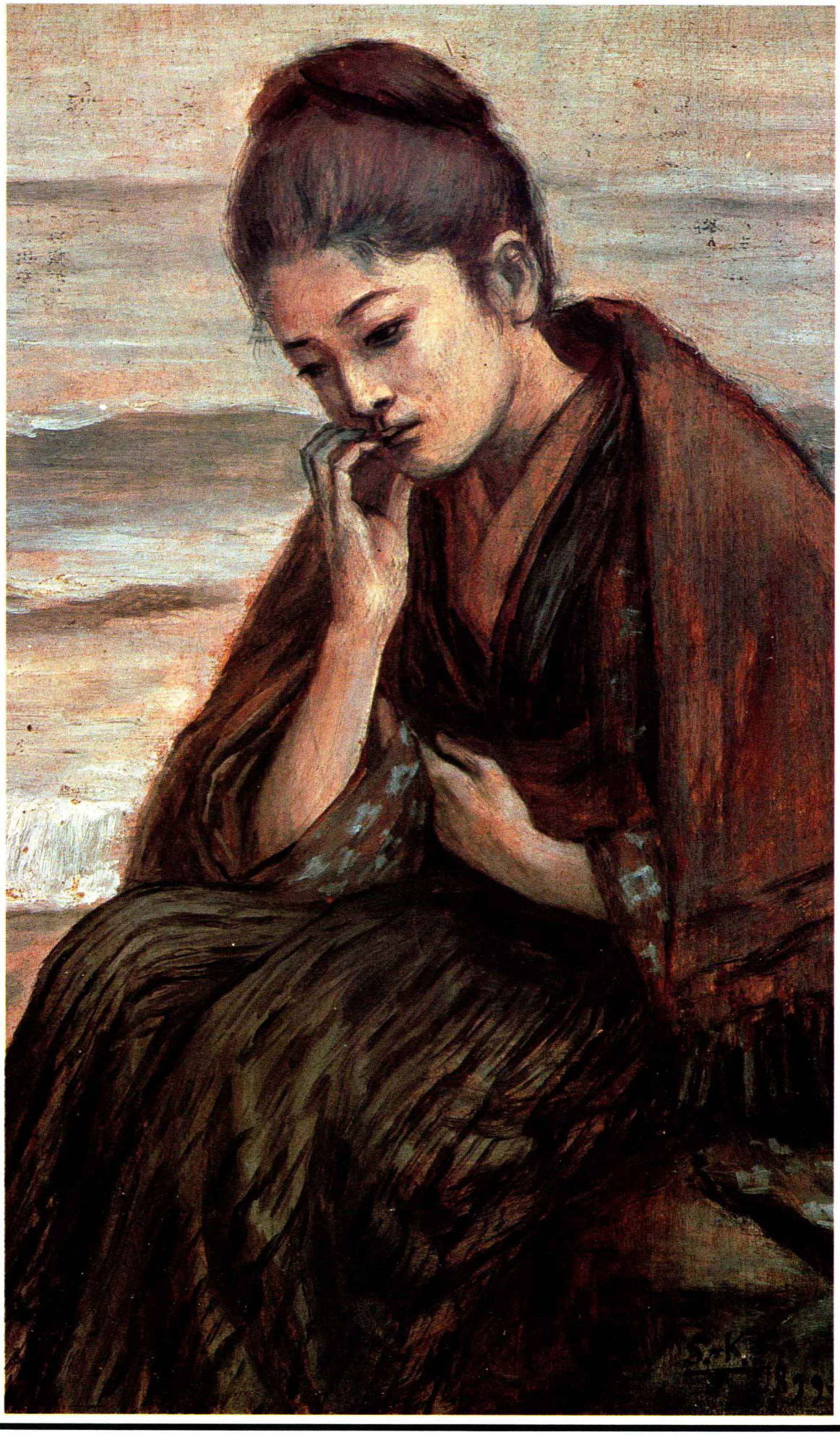
■造本管理

酒寄照男　野口元　北川昇

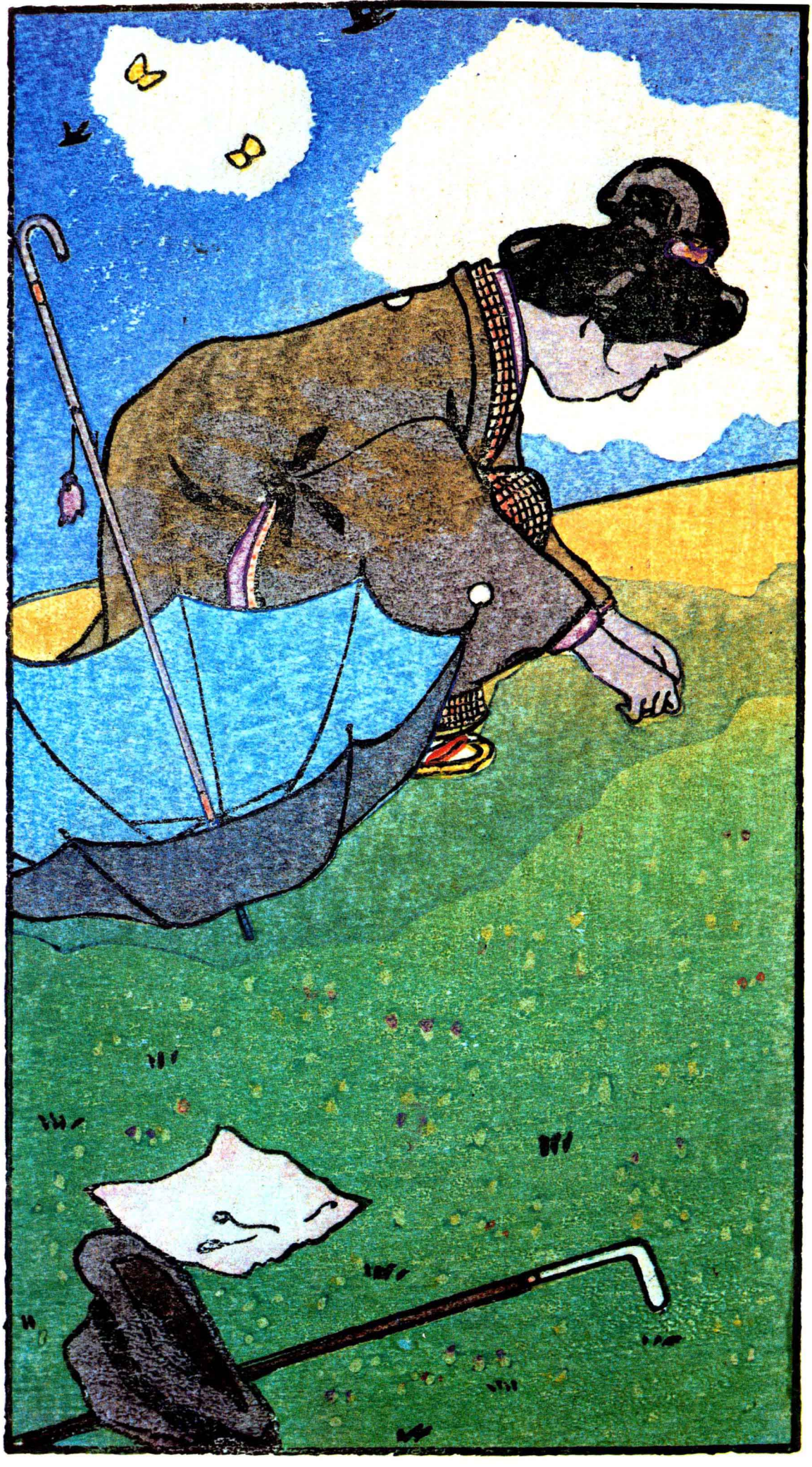
＊掲載いたしました関連資料のうち判明いたしました著作権者及び所蔵者の了解は、可能なかぎりいただきましたが、万一手落ちがございましたら、編集部までご連絡下さい。

不如帰

澤野久雄 訳



黒田清輝画・浪子像　蘆花恒春園蔵



陸軍中将片岡毅の長女・浪子

うららかな春の一日、新婚間もない浪子は夫とわらび狩りに――。明治のベストセラー、徳富蘆花の『不如帰』は、榛名山の山腹、上州伊香保温泉の場面から始まる。この地は作者・蘆花がこよなく愛していたところだ。

浪子は、この美しい日々が、いつまでも続くようにと祈らずにはいられない。しかし、幸せはあまりにも短く、はかなかった――中沢弘光『不如帰画譜』（明治四十四年刊）より

浪子の夫・海軍少尉川島武男

明治27年、日清戦争勃発――海軍少尉・川島武男は連合艦隊の旗艦、松島の艦上にあった。絶望する武男の行く手、遙かな海原には、別れて来た浪子の面影が浮かび、その耳には、何も知らぬ浪子の声が哀しく甦える。――早く帰ってちょうだいね。――中沢弘光『不如帰画譜』より

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

東京世田谷、まだ武蔵野の面影を残す一画に、蘆花恒春園がある。ここは、晩年の蘆花が夫人とともに住み、小説を書き、晴耕雨読の生活を楽しんだところ。広大な土地の一部は蘆花公園に、そして幾棟もあった住居はそのままに残されて、往時の面影を伝えている。岡精一画「恒春園」　蘆花恒春園蔵

不如帰

ほととぎす

東山魁夷画　残照　東京国立近代美術館蔵　山々を夕陽が明るくいろどって……

上編

一

五月はじめの、ある晴れた日の夕方である。上州伊香保の千明*という宿では、三階の障子を少し開いて、一人の婦人が外の景色を眺めていた。品のいい丸髷*姿で、草色の紐をつけた小紋*の被布*を着ている。

色白で細おもて、眉がやや迫って頬のあたりがいくらか寒々しいが、やせぎすでいかにもしおらしい。夏の夕やみにほのかに咲く月見草とでも、形容したい婦人である。

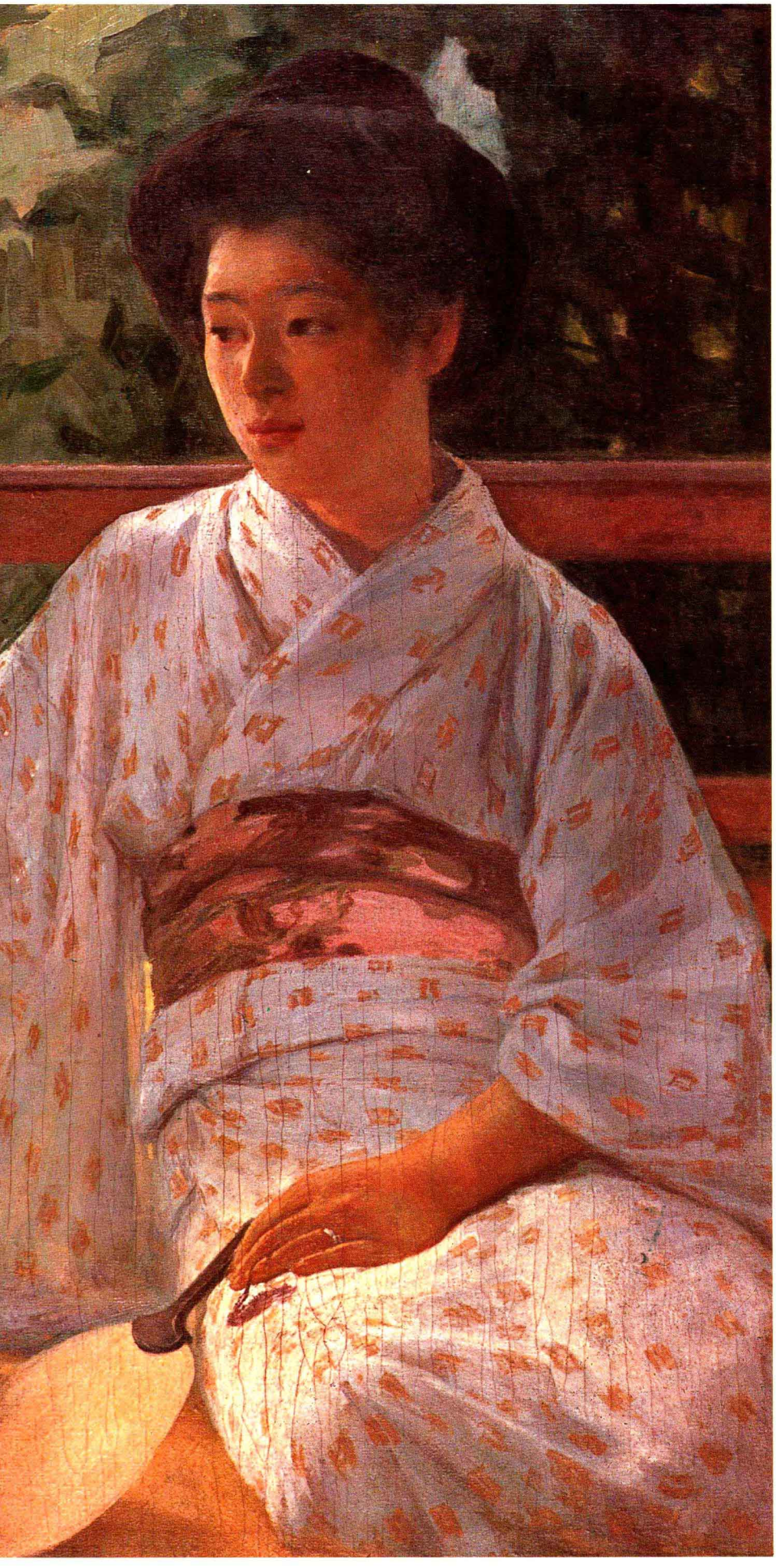
春の日は、西に傾いた。遠くは日光*、足尾から越後境の山々、近くは小野子、子持、赤城の峰が、入日をあびて花やかに夕映えしている。とびゆく鳥まで金色に見え

*上州伊香保　群馬県伊香保町。榛名山山腹にある温泉地。蘆花はこの地を愛した。

*千明という宿　仁泉亭千明旅館。蘆花の定宿。彼はこの旅館で病没した。

*丸髷　結婚した女性の結う代表的な日本髪。頭頂部に平たい楕円形の髪をつけている。

*小紋　細かな模様を散らした縮緬。縮緬は絹織物の一つ。



手すりにもたれて新妻浪子は夫の帰りを……
満谷国四郎画　二階　東京国立博物館蔵

そうな中を、赤城の向こうからちぎれ雲がうかび出した。その雲の流れを見まもっているうちに、夕風が立ってきた。空の色も移る。すると障子の中に立つ婦人の顔だけが、いっそう白くなるようだった。

「お嬢さま。おやどうしましょう、また口が滑って……。あの、奥様、ただいま帰りました。おや、まっくらで……奥様、どこにいらっしゃいますの？」

「ほほ……。ここにいるよ」

「おや、そんな所に……。早くお入りなさいませ。お風邪を召しますよ。それにしても旦那様はまだお帰りじゃございませんの？」

「どうなすったんだろうね」

といって障子を離れながら、

「なんなら下へ頼んで、お迎えを出しておくれな」

「そうでございますね」

答えながら、手さぐりでマッチをすりランプをつけるのは、五十あまりの老女である。そのとき階段を踏む足音がして、宿の女中が上って来た。

「おや、恐れいります。旦那様はずいぶんごゆっくりで……はい。いましがた若い者をお迎えに差し上げました。

＊被布　明治時代に婦人と女児の着物として流行した。形はコートに近いが性格は羽織に同じ。丸い小衿と総のついた飾り紐が特徴。

＊日光、足尾から……　伊香保からは東方に栃木県の日光にある男体山が見え、その手前に足尾銅山が見える。また、新潟県との県境の山々が北西に見え、北東にかけて小野子山、子持山、赤城山などが望まれる。

もうお帰りでございましょう。お手紙が参りました」

「あら、お父様のお手紙……」

と、*髷の人は、さもなつかしそうに封書の表裏を打ちかえして見る。

「あの、殿様のお手紙で……？　早くうかがいたいものですね。ほほほ……。きっとまた面白いことを言っておいでしょう」

女中は戸をたて、火鉢に炭をつぎ足して去る。老女はふろしき包みを戸棚へしまい、立って近づいて来ると、

「本当に冷えますこと！　東京とはよほど違いますでございますね」

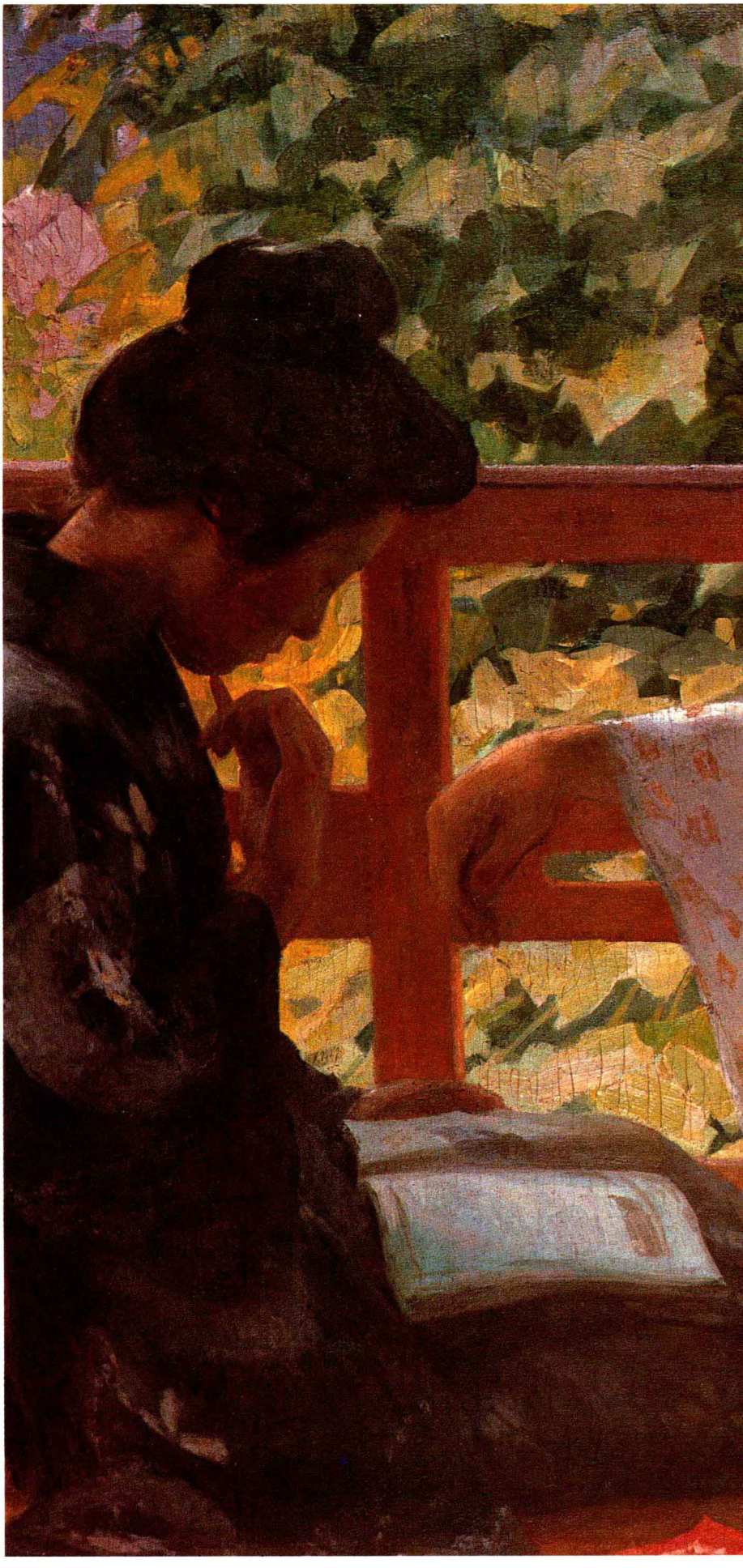
「五月に桜が咲くくらいだからねえ。ばあや、もっとこっちへお寄りな」

「ありがとうございます」

言いながら老女はつくづく婦人の顔をみつめて、

「本当に、嘘のようでございますね。こんな髷をお結いになってちゃんとすわっていらっしゃるところを見ますと、ばあやがお育て申しあげた方とは思えませんわ。奥様のお母様が亡くなられた時、ばあやの背中で、母様、母様とお泣きになったのは、昨日のことのようでございますのに……」

思わず涙声になって、



*髷の人　前記丸髷姿の婦人。浪子のこと。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com